ISSN 0919-0120
2008. 3　No.63

豊田市郷土資料館だより
No.63

Toyota City Museum
Of
Local History

目 次

- 埋蔵文化財調査速報　栃原遺跡 ―― 2
- 郷土史調査レポート　あるいた・みつけた　遺跡分布調査 ―― 3
- 「カイゼン」の元祖！？・宇都宮三郎 ―― 4
- 新収資料紹介　ー平成19年度購入・寄贈資料よりー ―― 5
- 遺跡紹介　榎本城 ―― 6
- 市史編さん報告　平成20年度の活動について ―― 7
- 文化財シリーズ63・資料館NEWS ―― 8

井上１号墳出土鉄器
井上１号墳(井上町)からは鉄刀、鉄鉾などがまとまって出土しました。
古墳時代中期の貴重な資料です。現在報告書を作成中です。
(左上写真:槍に残っている組紐の跡)

○栃原（とちはら）遺跡〔東山町２丁目〕

栃原遺跡は標高約68ｍの河岸段丘上に位置する集落遺跡です。昨年9月より総面積5,000㎡に及ぶ発掘調査を開始し、昨年末までに南側のＡ地区（2,200㎡）の調査が完了しています。Ａ地区では前号でもお伝えしたように、弥生時代～古墳時代の竪穴建物（18棟）、掘立柱建物（３棟）、大溝等が見つかっており、弥生時代を中心とした集落の存在が明らかとなっています。

現在調査中の北側（Ｂ地区、2,500㎡）では、不思議なことに弥生時代の住居が一棟も出てきませんでした。代わりに現れたのは、同じ時代の方形周溝墓群（ほうけいしゅうこうぼぐん）です。方形周溝墓とは、周囲に溝を巡らせた方形のお墓のことで、現在のところ12基が確認されています。栃原遺跡は大変見晴らしが良く、まさにお墓を造るのに絶好の場所だったといえるでしょう。また、Ａ地区で見つかった大溝の続きは、方形周溝墓群の南側を西へ延びており、墓域（北側）と居住域（南側）を区画する溝だったようです。

今回の調査で見つかった方形周溝墓は、１辺の大きさが３ｍ～10ｍと規模に明らかな差が認められ、かつ似たような規模のお墓がかたまって築造されています。残念ながら、いずれも墳丘や埋葬施設は残っておらず、周りに掘られた溝（周溝）だけが残存していました。

しかし、周溝からは大きな発見がありました。いくつかの周溝の中には方形の土坑がさらに掘り込まれており、なかでもＳＺ112周溝内土坑からは、大きな壺が、

ＳＺ112周溝内出土土器棺

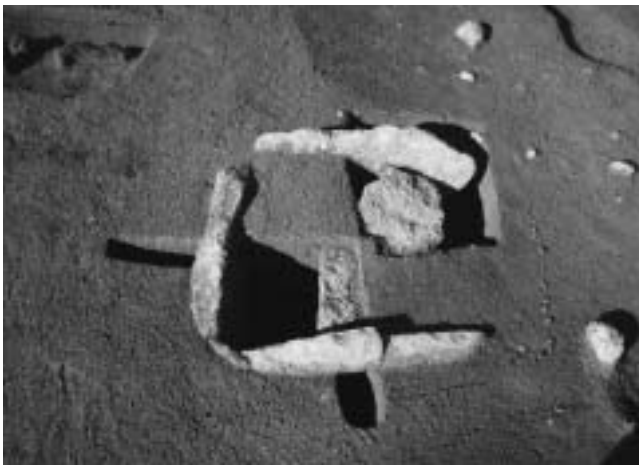
別の土器を蓋（ふた）代わりに被（かぶ）せた状態で見つかりました。土器をお棺として埋納したものと思われます。この土器棺は、中に土がほとんど落ち込んでいないという、極めて良好な保存状態でした。図面や写真等の記録を取り、慎重に取り上げた後、いよいよ中を覗いてみると……残念、中は空っぽでした。わずかな内面付着物の分析結果からも、人骨等の痕跡は認められませんでした。壺の口の大きさも、大人の腕がやっと入る程度。いったいどういうことでしょうか？

また、Ｂ地区では弥生時代の遺構の下から縄文時代の竪穴建物が３棟確認されており、そのうち１つの住居からは方形の石囲炉（いしがこいろ）が見つかっています。

弥生時代を中心として、徐々にその全貌を現し始めた栃原遺跡。調査はいよいよクライマックスを迎えます。

（田中　俊輔）

弥生時代の方形周溝墓群



縄文時代竪穴建物内部の方形石囲炉

郷土史
調査レポート

あるいた・みつけた

遺跡分布調査

豊田市郷土資料館では、新たに豊田市に加わった町村について詳細遺跡分布調査を進めてきました。今年度までに藤岡地区と小原地区が完了し、新規遺跡の登録準備と遺跡地図の作成をおこなっているところです。これらは、不慮の開発により遺跡が破壊されることを防ぐ資料として活用されます。両地区の方々には、「遺跡分布調査を行います」という広報とよたの記事や自治区回覧、近隣を歩く調査員を見てご存知の方もいるでしょう。調査の主力メンバーは南山大学で考古学を勉強する学生達です。田や畑の表面に散らばっている古い土器や陶器、石器を探してひたすら歩きます。場所によってたくさん拾えるところと、全く拾えない場所があります。たくさん拾える場所で、しかも生活に適した立地の場所は、遺跡の候補として地図に記録していきます。

遺跡分布調査は、「歩く」「拾う」ことのほかに「話す」ことが基本です。最初は初対面の人にうまく話しかけられず、地域の人たちに不審がられた学生達も、だんだん馴れてくると積極的に挨拶し、世間話を挟みつつ重要な情報をつかんで来るようになりました。

その中でよく上がった話題として、いわゆる「47災害」があります。昭和47年７月、集中豪雨により、藤岡・小原地区では山崩れや河川の決壊が起こり多くの方が亡くなりました。その後の災害復旧により、耕地整備や河川改修が進み、古来より残されてきた農村の景観は大きく変わりました。遺跡も災害による流出や復旧に伴う工事により損壊が著しく、以前は「雨が降ったあとの畑で、やじりがキラキラ光って見えた」ほどの遺跡が失われたことは、やむを得ないとは言え残念なことです。

２年度にわたる調査には、特筆すべき成果も多くありました。特に注目したいのは窯業に関する遺跡です。両地区とも原料生産地としてはよく知られています。これまでに藤岡地区には鎌倉時代・室町時代の窯が多くあり、明治時代の窯も９ヶ所で確認されているものの、その実態はあまり知られていませんでした。今回の調査では、隣の小原地区でも、明治時代に開窯された４基の窯の存在を確認することができました。これらの窯は「登窯（のぼりがま）」と呼ばれるタイプで、斜面に築かれており、製品を焼く「焼成室」が階段状に連なります。薪を用いた大量生産には最も適した構造で、やきもの産地として著名な東濃や瀬戸では江戸時代初期に導入されていました。しかし江戸中期以降、登窯は住宅地に近接して築かれるようになり、戦後、市街化が進む中で壊滅の危機に瀕しています。

小原地区の窯は茶碗や湯呑みなど日常食器の生産が中心です。村誌によると明治10年頃に李町で有志により起業されたのが皮切りとなったようです。100年前の人々が、地域産業を興そうと奮闘した足跡として重要な遺跡と言えるでしょう。

今年度から当事業を担当しつつ感じてきたことがあります。それは、遺跡分布調査は単に「遺跡の保護」のみを目的としたものではなく、地域の「歴史資源」や「歴史の記憶」がどれくらい残っているかを知り、その活用の手立てを探る一歩なのだということです。

来年度は足助地区の調査を実施します。皆さんのお宅の近くを白い腕章をつけた調査員が歩きます。ご理解とご協力をお願いいたします。

（髙橋　健太郎）

分布調査の様子（市場城）

明治時代の登窯（上仁木町）

郷土史
調査レポート

『カイゼン』の元祖!?・宇都宮三郎

明治初期の技術者魂

『醸造雑誌』37号と38号（明治23年刊）に、豊田市ゆかりの近代化学技術者・宇都宮三郎が明治22年10月に香川県の西讃地方において講話した内容が掲載されています。この講話記録の中に、トヨタ生産方式の基本的な概念の一つである「改善(カイゼン)」に通じる考え方が述べられています。少々読み辛い部分もありますが、該当する部分を抜粋したので、ご一読ください(句読点・ルビは筆者補足)。

「凡そ工業上の改良と云えば　前に述べし如く余り漠然として何れより着手す可きなるや、其実務に当り居るものにしても手の下しようのなきものの如し。然りと雖ども予の考える処にては何の業にても夫々改良の方法あり・・・」

「凡そ百工の事を改良せんと欲せば　其業務の手順を極めて細に分ち得らるるだけ別け、其別けたる一々の手順に従来の職人が称える処の名を夫々に付し、付した以上はなお部分けに為し自分に篤と知了し置き其部分けに依り順次改良を企つべし。」

「一寸料理にて謂えば馬鈴薯の皮むきと云う手順名あり。日本にて剣術に上段中段下段と区別の名あるが如し。」

「工業上の改良を為すと云えば六ヶ敷ことのようなれども、其仕事の上に名を付するまでにて、其名が改良に一番肝要なるべし。此名は何の工業家の中にもある筈なれども、夫れは職人の云うところの名称なれば到底不規則ゆえ、其名の分け方と技術上より段々順序を追うて分けるを要す。」

「全体改良には夫々道があることにて、敢て知恵才覚に依らなくも法のある事ゆえ此法にさえ依るなれば、夫れより改良は出来得るものなり。」

（『醸造雑誌』第37号より）

彼の算術家の語に問は得難く答は得易しと云うことありて、算術家一の問題を起こすは容易ならざるも其答を為すは難あらざるが如く・・・」

「今日改良を企てなば一日早く出来るべし。亦十日後れて着手すれば十日後れて出来る筈なれば一寸にても心に其事を思付たれば、無形なれども最早改良に向い居る事と知るべし。」

「仮令ひ西洋より技術家を雇入れ多くの人の薬として改良せんとするも大に困難なるべし。役人や学者の飛び回りて色々と教示するも其効は如何程なるか。何にしても自分の力を始として国民の全力より推し及す程強きものはなかるべし。」

「何処迄も独立独歩で遣り通さねばならぬことと心得、皆な銘々に心となり改良すれば行はるゝなり。」

「経済上の話なれども、価値の点に就て謂えば価値は人の労働と心労とより成り立つと云う　・・・世の投機家の云う様なる濡れ手に粟を掴むが如きことは世界中廻はりて探ぬるとも決してなき筈なり。」

「改良と云うことは年々歳々休まず絶えず遣らねばならぬ・・・」

（『醸造雑誌』第38号より）

ここに現された宇都宮三郎の思想は、西洋技術を日本の状況に合わせて移植するなど、明治初期の殖産興業を牽引した彼の経験による徹底した現場主義に基づいています。作業従事者自らが意識を持って自ら工夫する意識を持たなければならないこと、そして改良は日々続けなければならないことなどは、まさに現代にも通じる「改善」の思想といえます。業務の分析と手順整理と言う基本的な考え方は、約120年前に行われた講演の内容としても、全く古さを感じません。宇都宮三郎には、現代からみてもまだまだ学ぶべき点が多く残されているようです。　（天野　博之）

＊この文章は平成18年11月に開催した発見館企画展「宇都宮三郎　最初の近代技術者になったサムライ」のワークシート用に準備した文章に加筆修正したものです。

＊『醸造雑誌』の記事については、醸造学会の秋山氏にご教示いただきました。ここに記してお礼申し上げます。

＊この講演記録には続きがありますが、残念ながらその部分(『醸造雑誌』第39号ヵ)を入手することができず、今回紹介できませんでした。

新収集資料紹介
－平成19年度購入・寄贈資料より－

○　内藤学文書軸「元亨利貞」

縦131㎝　横27.7㎝　（本年度購入資料）

内藤学文（1751～1794）は、挙母藩２代藩主で、紀州和歌山藩から養子に入った殿様です。藩校・崇化館を開校したり、洪水のため挙母城を移転したりしたことで知られています。また安永川を掘削するなど挙母城下町の治水に尽力しました。この資料は濃い墨で力強く書かれた書です。「元亨利貞」は易の言葉で、天の四つの徳をいいます。「元」は善の長、万物の始、「亨」は万物の長、「利」は庶民を利し、それぞれの良い事を得させること、「貞」は万物を成就させることとされています。藩主として仁政をたたえられた学文にふさわしい言葉といえましょう。

○　絵葉書「足助」５点

縦8.8㎝　横14.1㎝　（本年度購入資料）

「香嵐渓の紅葉と巴川清流」（左写真）「香嵐渓」「足助神社」「香積寺」「足助町全景」の５枚セットの絵葉書です。いずれも白黒写真をもとに作成された絵葉書で年代は不明ですが、香嵐渓という名称がつけられたのが昭和５年である点、絵葉書に写っている待月橋が木造である点から昭和初期（昭和５年～28年）の様子だと推定できます。足助町の町並みは木造の建物がほとんどで街道沿いに家が立ち並ぶ様子がよくわかり、かつての足助の様子を知る貴重な資料といえます。

○　「ひな人形御殿飾り」

昭和29年頃　小坂町　（本年度寄贈資料）

御殿の中に人形を飾る御殿飾りのひな人形です。幅が140㎝、高さ105㎝ある大きな御殿で、右側に能舞台があり高砂人形を飾るようになっています。市内小坂町の個人宅から寄贈をうけました。

人形は全部で17体あり、どれも状態のよいものです。御殿の保存もよく50年以上経っているとは思えないほど豪華で美しいもので、大切にされてきた様子が伺える資料です。

遺跡紹介

槙　本　城

豊田市内の山間部には開発を逃れて比較的良好な状態で今日まで残ってきた山城が比較的多く分布しています。57号では下山地区の大桑城を、58号では藤岡地区の川口城を紹介しました。今号では旭地区の槙本城（槙本町字大屋敷）を紹介します。

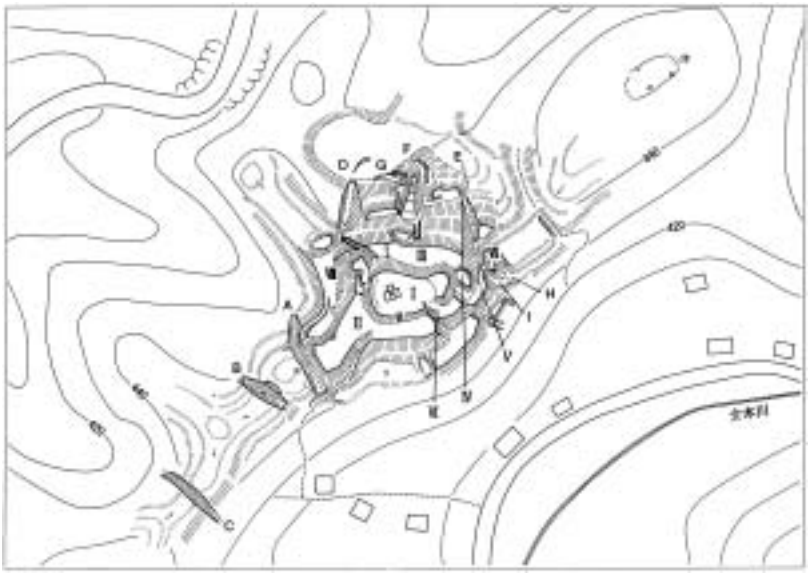
本城は介木川に沿った南北に細長い盆地を眼下に臨んだ標高450ｍの丘陵上に位置しています。眼下の平地との比高差は45ｍあります。主郭に神明神社が建てられ、その参道などにより部分的にもとの地形が失われたところがありますが、全体としては遺構がよく残っています。主郭の北側には空堀があり、平地に臨んだ南側には帯曲輪・虎口・馬出しといった遺構がみられます。本城は周辺地域の他の城と較べて小規模ながら優れた縄張りを持つ城であったといわれています。

地理的な立地からみると、三河から北の美濃国、北東の信濃国への交通の要衝にあたり、甲斐・信濃勢力と三河との戦いの中で、本城の位置は戦略上重要な立地にあたります。そのため、この地方の有力豪族により築城され、後に改修されていったといわれています。

本城の近くには市指定文化財の「いちょう」(常福寺)などもあります。市街地からは遠く離れたところにありますが、ぜひ訪ねてみてはいかがですか。

南から見上げた槙本城跡

城内の様子



（佐分 1994より）

【参考文献】

千田嘉博 1991
「槙本城」『定本・西三河の城』郷土出版社

佐分清親 1993
「槙本城」『藤岡・小原・旭の中世城館』愛知中世城郭研究会

佐分清親 1994
「槙本城」『愛知県中世城館跡調査報告Ⅱ（西三河地区）』愛知県教育委員会

Ⅰ　**主郭**　　Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ　**曲輪**
Ⅳ　**武者返し**　　Ⅶ　**馬出し**
A・B・C　**堀切**　　D・E　**竪堀**
F・G　**竪土塁**

（杉浦　裕幸）

市史編さん報告

平成２０年度の活動について

新修豊田市史の編さんでは、100名以上の研究者が原始、古代・中世など10の部会にわかれて、調査を行っています。今回は、平成20年度のそれぞれの部会の活動予定をお知らせします。

【原　始】

資料編は、①旧石器・縄文、②弥生・古墳、③古代以降の３巻で構成し、古い時代から順番に刊行します。

20年度は、足助、稲武など各地域資料館所蔵遺物から資料編①に掲載するもののリストアップを行い、土器や石器の実測、土器の復元などを行います。

【古代・中世】

宮内庁書陵部や本願寺史料研究所などで、賀茂郡関係の木簡、中条氏をはじめとする古記録、松平氏関係の写本などの調査を行います。

【近　世】

資料編は、①藤岡・小原・旭・稲武地区、②松平を除く旧市内、③足助・下山・松平地区、の３巻で構成します。

最初に刊行する①藤岡・小原・旭・稲武地区にある区有文書や個人所有文書の調査に重点を置き、マイクロフィルムやデジタルカメラによる撮影も行います。

【近　代】

20年度は資料編３冊の構成の検討を行うとともに、足助・稲武地区の行政、区有文書の調査を中心に行います。あわせて、豊田市に関する新聞調査や国立国会図書館、国立公文書館などの資料調査も行います。

【現　代】

議会議事録に関する調査、商業立地と消費行動の変化に関する調査、地元組織に関する調査、小中学校の児童・生徒に関する調査など、基礎的な資料の調査・蒐集を行います。

【自　然】

自然分野を、気象、地形・地質、生物、水文の４分野に分け、20～25年度の６年間を調査期間とします。20年度は、

○ 気象

市内40地点で気温、湿度の観測を行い、データの解析をします（２回)。

○ 地形・地質

市域のうち平野部の地形分類図を作成し、沖積低地での機械ボーリング調査や採集試料の年代測定・微化石分析を計画しています。

○ 生物

植物、菌類、昆虫類、淡水魚類、鳥類、両生類・爬虫類・哺乳類に分かれ、合併旧町村の調査を行います。

○ 水文

市内100～120地点で、雨量、河川水・地下水の水温、電気伝導度、ＰＨなどの測定を行います。

【民　俗】

19～23年度の５年間を調査期間とし、毎月１回の合同調査（各地で聞き取り調査）を行います。

別巻３冊は、①山のくらし、②平地のくらし、③挙母のくらしとトヨタ、で構成します。

【美術・工芸】

彫刻、絵画、典籍・書跡、工芸の４部門で構成しますが、典籍・書跡、工芸については21年度以降の調査を予定しています。

現在は、合併旧町村にある400か所以上の寺院・お堂を対象に彫刻（仏像）・仏教絵画の予備調査を行っており、12月までに終了する計画です。なお、彫刻は、４月から月１回の本調査を開始します。

【建　築】

建造物を寺院、神社、農家、町家（町並み)、近代化遺産、近代・現代建築、武家屋敷、茶室・書院、山車、舞台に類別し、市史には200件前後の掲載を予定しています。

20年度は、合併旧町村の神社の予備調査（調査対象のピックアップ)、旧市内の禅宗・浄土宗寺院の調査、高橋地区の山車（市指定有形民俗文化財）調査などを行います。

【概要版】

概要版は、これまでに刊行された市町村史誌を基に新豊田市の自然や歴史について、１冊、450頁前後にまとめるものです。

担当委員から今月末に提出される第１次原稿の検討、補充調査、第２次原稿の執筆・検討を行います。

（鈴木　昭彦）

文化財シリーズ

63

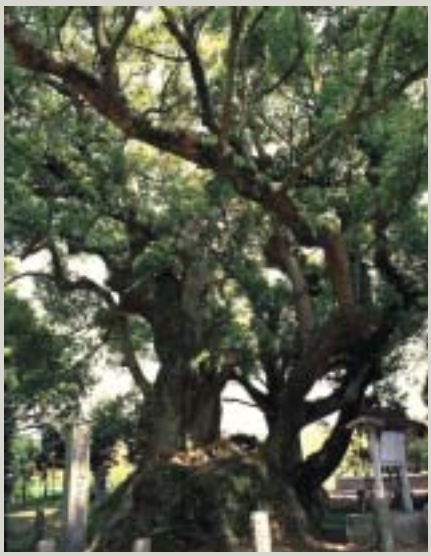
愛知県指定
天然記念物
八柱神社の樟

この木は、畝部東町の八柱神社境内、拝殿の東側に雄大に根を張っています。幹の根本が瘤状に膨らんで盛り上がり、特異な樹形です。この根本が盛り上がる原因は不明ですが、一説には地下水位と関係があるといわれていて、市内では吉原町の教照寺にも同じような形態の樟があります。この木から落ちた実が自生した樟(市指定天然記念物)が隣には生えているのですが、こちらは根が瘤状にはなっていません。

伝承によると、この樟は弘法大師が三河地方に仏の教えを説いてまわった際に植えられたといわれています。樹齢は約1,000年、樹高20ｍ、幹周17ｍの巨木で、自然の不思議を知ることができます。

クスノキ

樟、楠とも書きます。暖地に多く見られ、高さは20ｍ、幹の直径は２ｍ以上になります。全体に芳香があり、虫除けの樟脳はこの木から取られています。



資料館NEWS

文化財防火デー

毎年１月26日は「文化財防火デー」です。これは昭和24年(1949)１月26日に奈良県法隆寺の金堂壁画を焼損したことから、文化財に対する防火意識の高揚を図ろうと昭和30年(1955)に設けられました。

豊田市では１月24日守綱寺、27日隣松寺、平勝寺、28日猿投神社、29日六所神社舞台、30日如意寺で防火訓練を実施しました。

「風外本高」ゆかりの地・足助を訪ねる

特別展「風外本高展」の関連行事として風外ゆかりの地足助香積寺、普光寺を訪ねました。

香積寺では本堂、坐禅堂、墓、普光寺では「円通」額を見学しました。みなさん、風外和尚に思いをはせられていました。

資料館のひなまつり

年に一度大切なひな人形を飾るひなまつりは、春の訪れを告げる桃の節句として今でも続けられる行事の一つです。平成20年２月２日～３月２日の期間、資料館では土人形、御殿かざり、段かざり、内裏びなが飾られました。見学に訪れた人たちは、懐かしくも新鮮な気持ちで華やかな人形をみつめていました。

２月28日には中馬のおひなさん見学ツアー、29日大人向け、３月１日には親子向け「おこしもの」づくり講座を開催しました。

みなさんとても楽しんでいらっしゃいました。
期間中は1,535名の来館者があり、大盛況に終わりました。

利用案内

開館時間	9:00～17:00	
休 館 日	毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始	
入 場 料	無料(特別展開催中は有料)	
交　　通	名鉄「梅坪駅」より南へ	徒歩10分
	名鉄「豊田市駅」より北へ	徒歩15分
	愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ	徒歩15分
駐 車 場	約20台	

■豊田市郷土資料館だより No.63■

平成20年３月28日発行

編集･発行　豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561　　FAX (0565) 34-0095

E-mail ： rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL ： http://www.toyota-rekihaku.com

※豊田市郷土資料館だよりはＨＰでもご覧になれます。